

ノ ー ト

高齢者の地域支援サービスの利用実態に関する研究

— 鶴ヶ島市の事例を中心に —

工 藤 洋 子 橋 本 紀 子

**A Study on the Utilization Status of Community Practice and
Home Care Services for Elderly in the Community**
— Case Study of the Elderly Living in Tsurugashima City —

Youko KUDOU and Noriko HASHIMOTO

The purpose of this study is to analyze the present status and problems in the utilization of community practice and home services for the elderly in Tsurugashima city.

The results are as follows:

1. There were two people who had no information about the community practice and home care services and therefore did not utilize them. These two people were in danger of being isolated from the neighborhood soon, and, living by themselves, their lives would be threatened. It is important to make the regional network based on the home care support center.
2. They got the information about the utilization of the services from the administration and the community in the neighborhood. Moreover they have got it from the public information and the circular note, etc.; thus it was suggested that these were important information sources for them.
3. Most people answered that they had no idea about the demand for and expectation of the services. They could not form images of becoming older senior citizen in their generation. The contents the available services had not been widely known among the people. Thus it was suggested that these things increase knowledge among people who had no idea about the services.
4. The most common impression we had through this investigation is that people are solitary. Therefor one of the important points of the senior citizen welfare is how to relieve their loneliness and to provide fine support given the individuality of the elderly.

I. はじめに

高齢者施策としての介護保険制度は、「介護の社会化」という理念のもとに在宅医療・介護が重視されている。要介護度により支給限度額のサービスを利用できるが、要介護者の疾患やその症状により、そのサービスだけでは在宅での生活を維持できないのが現状である。要介護度が重くなるにしたがって、利用料の負担額に耐えかね、サービスの利用を抑制する傾向にある。その要介護者が在宅の生活を続けるにあたり、極めて不利な状況で介護を担っているのは家族である。本来介護保険制度は、在宅サービスの充実をはかり、高齢者の自立支援をすることがねらいであるが、現実はそのような家族介護を前提

とした介護施策であり、介護者の多くは女性で、その8割を占めている¹⁾。

高齢者世帯全体からみると現在、「夫婦のみ世帯」は27.1%、「単独世帯」は19.7%、そのうち、女性の単独世帯は15.3%を占めている。2020年には「夫婦のみ世帯」34.0%、「単独世帯」31.2%に上昇するものと見込まれており、老々介護が予測されている²⁾。そのため、介護の社会化は緊急の課題となっている。

このように、単独、夫婦のみ世帯の増加が予測されているにも関わらず、家族介護を前提とした高齢者介護の捉え方では、在宅介護に限界がある。在宅介護の視点からは、単独世帯、夫婦のみ世帯の問題は見落とされてしまっている。

介護保険制度の導入後、高齢者は「申請」することによって初めてこの制度を利用することが可能となった。この「申請」で介護保険非該当者になった場合、その市町村が提供する高齢者福祉サービスを利用するためには、ここでも、「申請」が必要となる。

しかし、サービス利用が必要と思われる場合でも、申請していない高齢者もあり、その中には1人では申請のための手続きができない高齢者も含まれている。したがって、高齢者の在宅福祉の充実をはかるためには、そのような「申請していない高齢者」を視野に入れた地域支援サービスの展開を検討することが極めて重要である。

東京都練馬区では、このような「申請していない高齢者」を対象に「ご用聞き福祉」³⁾を始めている。

練馬区は、介護保険制度施行後「必要な方に必要なサービスをお届けする」ために、在宅介護支援センター職員が出向きサービスなどを紹介している。

この「ご用聞き福祉」の結果、介護保険のサービスが必要な人に介護保険サービスの手続きをし、また、非該当の人には介護予防のためのサービスを紹介するなど、高齢者の生活を支えるサービスを展開している。これらのことから、このような練馬区が実施している「ご用聞き福祉」と同じ役割や機能をもつ施策が、埼玉県鶴ヶ島市では有効であるのか、高齢者の福祉サービスに関する情報が行き届いているのか、また、どのようなサービスの展開があれば、高齢者が安心して暮らすことができるのかについて検討したいと考えた。

今回行った調査では、高齢者の生活実態や介護経験、介護に対する認識を含めた検討を行ったが、本稿では、地域支援サービスの利用実態と利用者の認識の分析を中心に報告する。また、調査全体を通じて明らかになったサービスに関わる高齢者の生活状況の典型事例について詳しく述べる。

Ⅱ. 地域支援サービス利用の実態と認識

1. 調査目的

- ①高齢者の福祉サービスに関する情報が行き届いているのか。
- ②どのようなサービスの展開があれば、高齢者が安心して暮らすことができるのか。

以上について、「単独世帯」「夫婦のみ世帯」の高齢者を対象に、現行の地域支援サービスの利用実態について分析し、その課題を検討する。

2. 調査方法

(1) 調査対象

調査対象は埼玉県鶴ヶ島市に在住の年齢が高齢期65歳以上の男女とした。

調査目的を話し、承諾を得られた計45名を対象に行った。

詳細は、市役所からの紹介13名（単独世帯13名）、民生委員、ボランティアからの紹介6名（単独世帯3名、

夫婦のみ世帯3名）、老人クラブ等の利用者26名（単独世帯9名、夫婦のみ世帯17名）である。

対象地域の特徴：埼玉県鶴ヶ島市は、総面積17.73km²、市域が狭く、全体的に宅地化が進んだ郊外都市の性格が強い。

埼玉県の高齢化率⁴⁾は13.41%、総平均年齢は40.0歳である。鶴ヶ島市は、高齢化率（65歳以上）9.3%。総平均年齢は38.7歳である。県内でも、下から2番目に低い老年人口割合である（H14）。

しかし、鶴ヶ島市の平成15年度の高齢化率⁵⁾は10.51%と上昇しており、平成19年には14.83%、平成24年には、20%になるものと見込まれている。そのため、高齢期をどのようにして健やかで生き生きと過ごすかが大きな課題となっている。

現在の鶴ヶ島市人口は68,214人。そのうち65歳以上の高齢者数は7,585人（H15. 10. 1）。単独世帯は658人、高齢者夫婦のみ世帯1,108世帯（H12）である。

(2) 調査枠組みと質問紙

先行研究の検討及び筆頭者が2003年4月から5月までの予備調査で明らかにした結果と先行研究⁶⁾をふまえ、調査枠組み（表1）と質問紙を作成した。

(3) 調査期間

2003年7月下旬～11月上旬

(4) 調査方法

①質問紙面接調査

奇縁法にて、承諾を得られた、単独世帯25名（女14名、男11名）、夫婦のみ世帯20名（女10名、男10名）、総計45人に対して個人宅や施設を訪問し、面接調査を行った。1人40分から6時間を要した。これは半構成的な面接法による質的調査の手法をとったものである。

調査枠組み（表1）に従い、特にサービス利用の有無を中心に分類し、分析を行った。その中から、利用、非利用に関わる典型的な事例について検討を行った。

②文献調査

高齢者の地域支援サービスに関する先行研究⁷⁾をおさえるとともに、調査枠組みに基づいて、質問紙調査で得られた結果を補完し考察するために、文献調査を行った。

Ⅲ. 結果および考察

(1) 対象者の背景（表2）

全体平均74.5歳であり、単独世帯の平均年齢75歳、夫婦のみ世帯平均年齢74.05歳であった。

居住形態についてみると、単独世帯は、持ち家64%であり、夫婦のみ世帯は、45%であった。また、夫婦のみ世帯の場合、公団に住む人は過半数を超えていた。対象はS50年以降に移住してきた人が約9割を占めており、ベッタウン化した特徴がみられる。そのため、地域とのつながりが弱い都市型高齢者が多かったといえる。

表 1 調査枠組み

大 項 目	中 項 目	小 項 目	設 問 番 号
対象者の状況	属性	年齢	問 1
		性別	問 2
		居住形態	問 3
		居住開始時期	問 4
		世帯状況	問 5
		家族構成	問 6-1) 2)
		既往歴	問 7
		就業状況	問 8
		現在の収入源	問 9
		介護保険申請の有無	問10-1) 2)
生活実態	日常生活行動	家事は誰が行っているか（買い物、掃除、洗濯、炊事）	問11
		困難になってきたことがあるか	問12
		火の始末が心配になるか	問13
		日頃心がけていることは何か	問14
		緊急時支援者の有無	問15
		誰に緊急時連絡するか	問16
		家族への連絡体制	問17
	食行動	3食食べているか	問18
		むせ込み	問19
		口腔問題	問20, 21
		食欲	問22
		楽しみ	問23
	健康状態	1年以内の入院の有無	問24
		あるとすればいつ退院したか	問25
		夜間の睡眠状況	問26
		転倒の有無	問27
		その後の後遺症の有無	問28
		運動量の減少	問29
		かかりつけ医の有無	問30
		通院場所	問31
		疾患の有無	問32
		いつ発症したか 期間	問33
		通院回数	問34
		通院の際の交通手段	問35
	交流活動	＜外出の状況＞	
		外出先	問37
		外出頻度	問36
		外出できない要因	問39
		交通手段は何か	問38
		＜地域交流＞	
		趣味や楽しみの有無	問40
		（個人・公的機関での活動）	問41
		友人や近所づきあいがあるか	問42, 44
		その人に会う頻度や程度	問43, 45
		＜家族との交流＞	
		家族に会う頻度、程度	問46, 47
		家族と何をするか	問48
		家族が何かするか	問49
		家族への期待	問50
地域支援サービスに関する実態と認識	サービスの実態	サービス内容の情報源	問66
		サービス利用の有無	問51
		利用しているサービス内容	問52, 53, 60
		いつから利用しているか	問51
		サービスを利用する回数	問54, 59
	認識	サービス提供場所へは何で行くか	問65
		サービスに対する満足感（料金を含む）	問56, 62
		サービス提供者の態度や姿勢はどうか	問57, 58, 63
		利用している理由	問55, 61, 64
		利用しない理由	問51
介護に関する実態と認識	介護体験	今後のサービスに対する希望	問67
		現在介護をしているか	問68, 71, 72
		現在代替え介護者はいるか	問70
		いつから介護をしていたか	問69
		過去に介護をしたことがあるか	問80-82
		その当時代替え介護者はいたか	問84
		どれくらいの期間介護をしていたか	問83
		当時のサービス利用の有無	問85
		入院経験の有無	問92, 93
		家族と介護について話し合うか	問94
	介護に関する認識	受けたサービスは十分であったか	問75-79, 86, 87
		サービス提供者の態度や姿勢はどうか	問73, 74, 87
		サービスに対する意見・要望	問67, 87
		誰に介護を受けたか	問89
		希望する介護場所はどこか	問90
		その場所の理由	問91
		別居子との同居を考えるか	問95

表2 調査対象者の属性

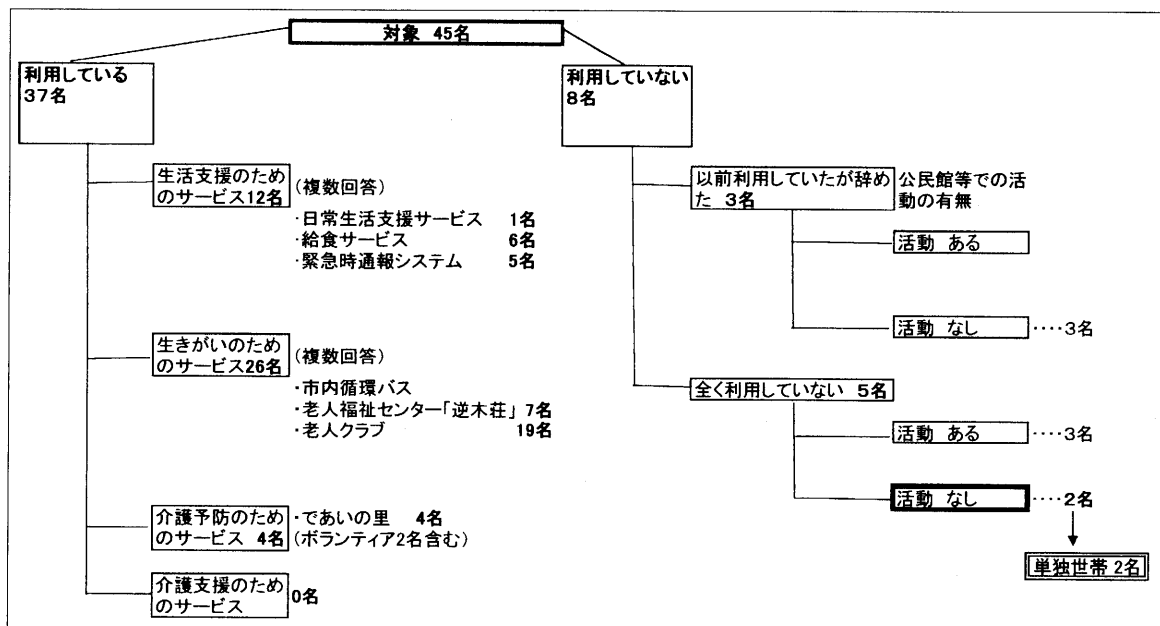
単独世帯						
番号	年齢	性別	地 区	元の職業 (※は現役)	居住形態	別居子の 居場所
1	83	男	松ヶ丘	教 師	公 団	都 内
2	71	女	松ヶ丘	夫の仕事 手伝い	公 団	県 内
3	78	男	松ヶ丘	郵便 他	借りマンション	市 内
4	66	女	鶴が丘	事 務	持ちマンション	無
5	67	男	鶴が丘	パネル大工	借りアパート	無
6	75	男	五味ヶ谷	塾 経 営	持ち家	都 内
7	72	男	上広谷	会 社 員	持ち家	都 内
8	79	女	藤 金	まかない	持ち家	県 外
9	72	男	藤 金	会社経営	持ち家	県 内
10	76	男	富士見	会 社 員	公 団	県 内
11	77	男	富士見	会社役員	持ちマンション	市 内
12	77	女	富士見	幼稚園長	借りマンション	無
13	78	女	共栄町	会 社 員	持ち家	県 外
14	65	女	羽折町	税理士(※)	持ち家	無
15	76	男	上新田	農 業(※)	持ち家	無
16	74	女	中新田	専業主婦	持ち家	県 外
17	77	男	下新田	自衛隊 他	持ち家	敷 地 内
18	75	女	下新田	経 理	持ち家	市内 近所
19	83	女	富士見	寮 監	公 団	県 内
20	72	女	脚折町	専業主婦	持ち家	県 内
21	76	女	脚折町	専業主婦	持ち家	県 内
22	71	男	脚折町	調 理 師	借りアパート	県 内
23	74	女	脚折町	専業主婦	持ち家	都 内
24	85	女	脚 折	洋 裁	借りアパート	市 内
25	75	女	藤 金	会 社 員	持ち家	都 内

平均年齢 74.9 歳 女平均年齢 75 歳, 男平均年齢 74.9 歳

夫婦のみ世帯						
番号	年齢	性別	地 区	元の職業 (※は現役)	居住形態	別居子の 居場所
1	70	男	松ヶ丘	自 営 業	公 団	都 内
2	66	女	松ヶ丘	店オーナー	公 団	都 内
3	69	女	松ヶ丘	専業主婦	公 団	都 内
4	70	女	松ヶ丘	美 容 師	公 団	県 内
5	77	男	松ヶ丘	教 師	持ち家	市 内
6	78	男	松ヶ丘	エンジニア	持ち家	県 内
7	69	女	松ヶ丘	自 営 業	公 団	市 内
8	71	女	松ヶ丘	専業主婦	公 団	無
9	77	男	富士見	作 家(※)	公 団	無
10	77	女	富士見	教師・経理	公 団	無
11	76	女	富士見	寮 監	公 団	県 内
12	84	男	富士見	公 務 員	公 団	県 内
13	73	男	富士見	自 営 業	公 団	県 外
14	80	男	脚折町	会社役員	持ち家	市 内
15	71	女	脚折町	専業主婦	持ち家	都 内
16	74	男	脚 折	公 務 員	持ち家	都内 県内
17	68	女	脚 折	専業主婦	持ち家	都内 県内
18	81	男	共栄町	エンジニア	持ち家	市 内
19	77	男	脚折町	公 務 員	持ち家	県 外
20	73	女	脚折町	専業主婦	持ち家	県 外

平均年齢 74.05 歳 女平均年齢 71 歳, 男平均年齢 77.1 歳

図1 現在のサービス利用の実態



(2) サービスの利用実態

①現在利用しているサービス (図1)

現在何らかのサービスを受けている人が37名, 以前利用したことがあるが, 今は受けていない人が3名, 全く利用していない人が5名。そのうち, 今は必要がないから利用しない人が3名, これまでに全くサービスを利用したことがない人が2名であった。

単独世帯, 夫婦のみ世帯ともに, 生きがいのためのサー

ビスである「老人クラブ」に入っている人が多かった。老人クラブはその地区の公民館や近くの集会所で行われるため, 徒歩でいける範囲にあることが, 入りやすい, 行きやすい要因になっていた。

②情報源 (表3)

実際にサービスを利用するにあたって, どこから情報を得ているかをみると, 単独世帯の場合は, ホームヘルプ, 給食などの日常生活に関するサービスの情報は, 市

表3 サービスの情報源

	利用 延べ 人数	行 政		医療機関		交 流		文 書		家 族	自 分
		市 役 所	社会福祉 協議会	病 院	ヘルパー ケアマネ	老人クラブ	知り合い	広 報	地区の回覧	家族から	自分で問 い合わせ
単 独 世 帯	32	6 (18.7%)	1 (3.1%)	2 (6.2%)	2 (6.2%)	1 (3.1%)	5 (15.6%)	3 (9.4%)	8 (25%)	5 (6.2%)	2 (6.2%)
夫婦のみ世帯	22	0	0	0	1 (4.5%)	5 (22.7%)	5 (22.7%)	5 (22.7%)	3 (13.6%)	1 (4.5%)	2 (9%)
合 計	54	6	1	2	3	6	10	8	11	3	4

役所等行政側からのアプローチによって得ていた。また、デイホームや老人クラブなどの介護予防、生きがいのサービスに関する情報は、単独、夫婦のみ世帯ともに、地域の交流から情報を得ている人が多かった。地区の回覧で文書が回ってくることに加え、さらに知り合いからも老人クラブに誘われることで、入りやすい結果となっている。小林ら⁸⁾の結果でも、地域組織への参加がサービス認知を有意に高めていたことが確認されており、サービスの情報を得るためには地域の交流は欠かせない。また、広報や回覧は重要な情報ルートであるため、行政は広報などで、いかにわかりやすく情報を提供していくかが課題となってくるだろう。

しかし、サービスを勧められた場合でも、その具体的な手続きの仕方はヘルパーさんに頼んでいること（事例1）や妻が使っている介護保険のケアマネジャーからの勧め（事例31）で、手続きは依頼しているなどがある。これらのように、たとえ情報はあっても、誰か介入者があって、手続きをしてくれる、手続きの仕方を教えてくれる人がいて初めて実際にサービスの利用にいたると思われる。

(3) サービスに対する認識・満足感

枚数上ふれる余裕がないため、改善点を簡単に述べる。

①生活支援のためのサービス

生活支援のためのサービスは、ホームヘルプ、給食、緊急システムを利用している人が多かった。

ホームヘルプサービスを利用している人（事例1）は、利用者のニーズにそって、サービス内容を変えてくれること、業務的ではない、人としてのふれあいが満足感につながっている。

しかし、利用したことがない人では、他人に甘えたくない（事例25）という心理的抑制があることや「その内容をよく知らない」「家に入られる」という「抵抗感」があることがあげられている。

給食サービスは、配達以外に安否確認として機能している。しかし、味を改善することや、給食サービスがあることを知らないという事実があげられた。

緊急通報サービスを利用している事例は、何らかの疾患を理由にこれを利用することによって、非常に安心感を得ている。しかし、台数が限られている（事例40）など問題があげられた。

②介護予防のためのサービス

デイホーム「であいの里」を利用している人は、比較的近所であるという人が集まっている。

しかし、まだであいの里が広く知られていないことや、ここまでくるのに、交通の便が悪いことや世代が違う、参加しにくい（事例20）など問題が残っている。

③生きがいのためのサービス

老人クラブ、老人福祉センター「逆木荘」があるが、老人クラブを利用している要因として、近くの集会所でやっているという「距離」、内容が高齢者対象としたものではなく、誰もが楽しめるという「内容」、近所の人から、誘われたり、誘ったりする「交流」があるという点があげられている。

しかし、高齢者のみで運営するには厳しい状況があり、若い世代にも参加してほしい（事例13）という希望があった。また、意見の中に、男性の参加率が低い（事例10）という実態が明らかになった。今回の調査でも、老人クラブに入っている男性は単独、夫婦のみ世帯共に、20～30%であり、女性の半分以下であった。

老人クラブを利用していない人の事例では、誘われたことがない（事例15）地元住民と新住民との隔たりがあった（事例21）ことがあげられていた。他に、「世代の違い」「趣味や内容の違い」があげられている（事例4, 6, 14, 18, 42）。

そのため、今後転入者が増加すると思われる鶴ヶ島市では、地元住民、新住民との隔たりをなくすために、多様な活動のプログラムを開発することや行事に誘うことが重要になると思われる。

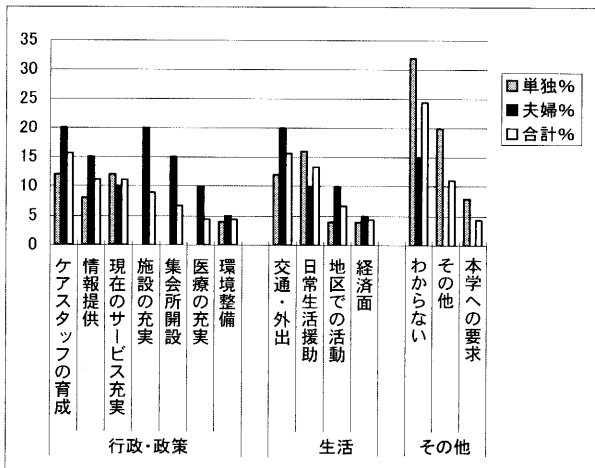
老人福祉センター「逆木荘」は、多様なプログラムがあり、スタッフも充実している。通うことで、活動の場が広がり、交流がもてることが身体的・精神的機能の向上、維持に効果があった事例（事例24）やこの施設でのお風呂の利用（事例8, 11, 13, 16, 42）は、日常生活の手段のサポートの役割を果たしていた。

しかし、利用していない人の意見では、交通の便が悪い、新住民は参加しにくいことがあげられていた（事例10, 20, 25, 28）。

(4) 今後のサービスに対する意見（図2）

今後のサービスに対する、要求や希望についてはわからないと答えた人が、単独世帯32%、夫婦のみ世帯15%と最も高かった。また、「私達の時代は誰も、老後のことなんて話してくれなかった」（事例5, 12）という意見があり、サービス自体がどんなものか想像がつかない時代背景がある。また現在あるサービス内容も周知されていないことが、わからないという現状をもたらししているものと考えられる。

図2 今後のサービスについての意見



(5) サービス利用に関わる高齢者の生活状況の典型的な事例

全体の調査を通じて、特に特徴的であった事例、5例について以下、詳しく述べる。これらは、高齢者を「個」として捉えることが、地域支援サービスを検討する際には、最も重要なポイントとなることを示唆する事例である。

① サービスを多く利用しているが、孤独感の強い事例 — 事例1 83歳男 単独世帯

この事例は、6年前から、妻を亡くし単独世帯となっている。別居子は、2人であるが、1人は、海外在住にて、主に次男が週に1度は必ず訪問している。その別居子は、洗濯をしてくれたり、一緒に食事をしたりしている。

サービスの利用に関しては、今回の調査対象者の中で、最も多い（ホームヘルプ、給食、緊急通報システム、老人クラブ、公民館での活動）。平成14年度からサービスを潤沢にうけているが、現在のところ日常生活行動は、自立している。元の職業は、教師（校長）であったことから、自ら、小学校等に出向き、授業を行ったり、公民館などで、得意な絵画の講師を務めるなど、社会参加等をしている。また、近所に住む小学生や、知人が訪ねてきたり、食事会などをしている。そのため、一週間のスケジュールをみると、毎日何かしらの予定が入っている状況である。

しかし、本人は、

「ヘルパーさんも来て、公民館に絵を教えに行って、老人クラブもあって、たまに近所の人も遊びにくる。それでも寂しいんだ。寂しいものよ。それにね、僕はいつ逝ってもいいと思ってるんだから。こっろっと死んでもいいんだから。ただね、寂しいよ。この気持ちは、老人になってみないとわからないよ。」

と話され、次々と自分の趣味（話芸）や得意とする分野について、本や資料を示しながら話し続けた。訪問調査は、6時間にもおよび、話の端々に寂しさや、孤独を訴

える部分があった。

<考察>

教師（校長）であったことから、自分の意見を比較的自由に主張でき、教育的な立場で話をする人間関係や交流があった。現在も、その交流などが、保たれており、さらにサービス利用から、交流も深められている。しかし、主観的な孤独感が強く、そこには、どのように生活してきたかが影響していると考えられる。将来、心身の上の変化がおきた場合には、その状況に適応しにくいのではないだろうか。また、配偶者を亡くしてから、6年経過しているが、多くの配偶者との思い出を話されたことから、未だに、配偶者の死が孤独感をいっそう強めている要因になっているのではないかと考えられる。

② 積極的に地域交流をしている事例

— 事例27 66歳女 夫婦のみ世帯

この事例は、60歳まで店のオーナーとして働き続けた。

実母の介護が必要になったため、家族（夫）と離れ、鶴ヶ島市に移住し、実母と同居しはじめた。その時の介護について、本人は、

「私は60歳で人生がぶっちぎられ、介護が唯一の仕事になっていった。年金は減るし、保障はないし、負担はあるし払うのが精一杯。なのに使わずに死んだのよ。あの当時、こっちに引越してきたばかりだったから、病院がどこにあるのか、わからない。パンフレットだけだったし。介護経験は母が初めてではなかったけど、40歳の時に見たのと60歳ではせつなさが違った。明日はわが身と思って、明日の自分をみているようだった。」

介護は、言葉だけがいっぱい大きくでているけど、実態はわびしくって介護にかなったサービスなんてない。地元住民中心で税金を払っても、母はサービスをうけてない。介護保険が導入されて、要介護認定が3だった。その当時はケアマネージャーさんも1年に1回しか来ないから、その認定のままで亡くなった。」

というように新しい土地で介護をすることについて語ってくれた。その介護は、4年に及んだ。実母が亡くなってから、鶴ヶ島市で夫と同居。以前住んでいた地域とは交流があるが、移住して新しい土地での交流はなく、実母が亡くなったことをまぎらわすことをきっかけに、老人会に入り、近所の人から誘われて公民館での活動に参加するようになった。

近所の人との交流も積極的であり、近所の人との行き来や隣の家族、老人会の人にお惣菜を届けたり、所属している老人会や公民館での活動に近所の人を誘ったりしている。また、自治会での行事にも積極的に参加している。

積極的に地域交流する妻とは反対に、その夫は、定年退職後サービスを利用したことがなく、家で過ごすことが多い。

このことについて、夫は

「サラリーマンのあとは何していいかわからないよ。会社のつきあいばかりしてきたし、男っていうのは、利得だけのつきあいが多から、そうそう友人なんかない。ゴルフやマージャン、4人集まらないとできないっていうものばかりやって、職関係のつきあいが多し、利害で動くからね。皆、退職後何しているのか教えてほしいよ。恥ずかしいっていうよりも、どうして、どうやるのか手続きも知りたいね。サラリーマンは会社で、地元には住んでいるのみ。女の人は家事など自分でやったりしているけど、サラリーマンは65歳定年で、その地域社会を知らない人がどう生活していくのが問題だよ。自分のことができないのは自己責任でもあるけど、老いる、老後の生活やリズムがうつる、旅の本質と同じだよ。土地や人間性や食、風土が基本になってくる。余暇をどう過ごすかだよ。」

というように語っており、実際の生活では妻に任せているのが現状である。

<考察>

この事例では、家事労働は、夫に買い物、金銭管理をしてもらっているが、それ以外は、妻が全て行い、伝統的な性別役割分業が貫徹している。

さらに、この事例の夫は地域交流がなく、近所、友人つきあいもない。そのような夫を支えているのが妻であり、妻を媒体にして情報等を得ているといつてよい。

将来、妻が倒れた時には、夫は介護ばかりではなく、日常生活も厳しい状況に直面することになるだろう。この事例の夫婦は調査対象者の中で一番若い年齢であり、現在は何も問題は無いが、日常生活状況からみると、将来はその問題が、もっと深刻化するであろう。中田ら⁹⁾は、ADLに何の支障もない高齢者において趣味活動の有無、運動の有無、家族交流が閉じこもり予備軍と有意な関係があるという結果から、地域活動の減少は、意欲が低下し、閉じこもり状態となり、身体的機能の低下につながることを指摘しており、片山ら¹⁰⁾も、生活習慣の他に、趣味活動等が身体機能の維持に影響があると指摘している。そのため、今ある地域活動内容の詳細を情報提供することや男性が参加しやすいような講座の開催など、集まれるプログラムの開発が望まれる。

この事例の他にも、家事労働の大半は女性が担っている現状があり、今回の調査以外にもこのような実態が多く存在するのではないだろうか。

③介護保険の適応が望まれる事例－夫が軽度の痴呆の場合－

－事例36 76歳女 夫婦のみ世帯

この事例は、軽度の痴呆をもつ夫（84歳）を抱えている。夫の介護保険を申請したところ、非該当となり、現在は夫婦のみの生活を継続している。

しかし、妻だけの社会参加や、自由時間は全く持てず、常に夫を見守る生活をしている。サービスは、唯一近くの集会所で行われる老人クラブに夫と参加しているのみ

である。

彼女は以下のように、現在の状況について話してくれた。

「自分が入院したら、夫は何も出来ないで、自分が入院した時、こんなにも周りに迷惑をかけるんだと思った。前は近所に遊びにいったけれど、夫を1人で家に置いてくと心配だし、何時に行つて何時に帰ってくるのかと言いついて、老人会にも一緒に行くか聞いていたら、行きたいっていうから、参加するようになった。どこへ行くにもつれていく。それこそ、髪切りに行くときでもなんでも。」

さらに、サービスの要望について次のような要求をしていた。

「週2回でも世話をしてくれる人がいい。1年増しに体が弱っているから。」

2人で一緒にできることで、近いところ。私はやろうと思えばできるけど、1人で行つても、身がはいらない。置いてきたことが気になって。だから、近くでやる老人会は幸せだと思う。どこへ出かけるのも夫を連れて行かないといけなし、その準備が大変。何度も『今日はどこへ行くんだっけ?』って出かけるまで聞いて、これに着替えるんだって言つても、1人でやなくて。忘れちゃうんだよね。だから、出かけるのが大変。皆と時間を約束してなんていうのは、皆と同じ行動が出来ないから……。

私が入院した時、何にも出来ない夫をどうするか。ホームにしたつて、夫は私が居なきゃいけないと思う。車で迎えが来てサービスを夫が使用して、付き添いは使えないから、私は自転車かなんかで行つて、ただ見るのもね……。

逆木荘に行つて、歌や踊りとか子供のようないから入りたくないし、しかも、片方、片方になると、またどうかと思う。だからこの辺の近所で。2人で一緒にできる、近いところのものがいい。

介護保険を使えない、でも2人暮らし。片方が倒れたらと思うと……。おじいさん自身、入院して退院してから、痴呆が進んだんだよね。

息子や娘はうちにきなよつて言うからどっちに行こうかと思う。1人になったら。でも、長男達にも迷惑がかかるし、夫のことはお金がかからないように世話をするしかない。」

と語っていた。

<考察>

いわゆる「老々介護」であり、介護者は、何らかのサービスを利用したくても、制限されている。

この状態は、いずれ何らかの問題となつて表出せざるをえないのではないと思われる。そのため、たとえ非該当であっても、深刻化する事態を抑えるために、フォローアップが必要である。サービスを利用したくても、交通手段の問題や後期高齢者である妻が介護しながら遠い場所へ行くには難しい状況である。そのため、集会所

など近い場所を利用して、趣味や講座などサービスを展開することが必要であると考えます。また、身体的変化を早めに察知し、予防していく為にも、練馬区の「ご用聞き福祉」のような活動や、専門家が地域生活に介入できるようなシステムが必要ではないだろうか。

この事例のように、地域には、潜在的なニーズが増えているのではないだろうか。

④情報もれの事例

これまでに全くサービスを利用したことがない2名の事例である。ここでは、彼らの生活状況について詳しく述べたい。

1) 生活保護が必要な事例

－事例5 67歳男 単独世帯

この事例は、地方から上京、東京の工場で働いてきた。しかし、その工場が倒産したため、20年以上パネル大工として働いていた。仕事のために途中から、鶴ヶ島市に、移住してきた。所帯は持ったことがなく、現在はアパートでひとり暮らしをしている。

訪問した際、ポストには、沢山の広告が入っており、部屋も荒れ、少し異臭をはなっていた。衛生状況はかなり悪い。

電化製品は、炊飯器のみ。冷蔵庫も壊れており、食物は、ダンボール箱に入っている、米、醤油、味噌、ウーロン茶の空いたペットボトル500mlであった。

本人の話によると、

「電話はひいてない。携帯もない。何もないから、万が一の時は困るね。所帯もったことがないから、それが困る。」

兄が、月に1回、米や生活用品なんか持ってきてくれる。他には誰にも会ってない。この辺の人？ よくわからない。誰にも会ってないから。

毎日、散歩がてらに自転車で走るくらい。

仕事がない。仕事がないことが心配。兄弟で仕事していたけれど、今はない。お金もない。昔は飲みについて、そこでいろいろ話したんだけど……。今は誰とも話さない。風呂に行くと、その時少し話すから、風呂のサービスはいい。

最近自転車に乗っても足腰が弱ったと感じる。いつどうなるのか心配。

サービス？ どんなことかわからない。兄に迷惑がかかるし、よくわからない。」

と語っていた。この事例には、食物をもって再度1ヶ月後訪問した。部屋はあいかわらず荒れていたが、『今日兄が来て、風呂に行ってきたんだ。』と嬉しそうに話をしてくれた。持参した食物をみて、多弁になった。『和食が好き。何でも食べれる。この商品は、自分の実家の方で作ったやつだ。なつかしいな。』と述べた。

彼は食べ物で、嫌いなものはないが、経済的な理由もあり、ごみの状況からみると、毎日ご飯のみ食べているだろうと思われる。

<考察>

この事例は、民生委員と話し、生活保護の手続きに至った。

移住してきてから、交流関係がなく、近所つきあいもない。若い時は知り合いではなくても、飲み屋で話をしていたという。経済的な理由もあり、生活は兄弟に頼っている。現在は、自転車で町を走るのが、日課であるが、誰の目も入っておらず、月に1度兄の訪問だけであるため、地域から孤立している。また、生活環境も悪く、栄養状態も悪化していると思われるため、サービスや何かしらの手助けが必要であろう。

そのような事例にアプローチするためには、地域支援ネットワークづくりは欠かせない。

2) 全く情報が無い事例

－事例15 76歳男 単独世帯

この事例の家は、300年続いている。9年前までは、姉家族と一緒に住んでいた。義兄、姉が亡くなり、今は一人で、農業をしている。畑が3箇所あり、車でまわって、高倉の直売に野菜を出して売って生計を立てている。所帯はもったことがない。

本人の話によると、

「農業は、厳しい。税金は高いけど、国民年金は2ヶ月で、8万円しかもらえない。ほとんど野菜ばかり食べて。区画整理されて、新しい住民が入ってきたけど、知らない人ばかり。スーパーも出来て便利だけど、あまり行かないね。」

サービスの内容は聞かない。仕事仲間とは、仕事の話ししかないね。

健康第一だから、健康に関するものがあるのは理想だが、お金、年中出すから……。サービスを利用すると、お金を使うことになる。贅沢はできないよ。派手にやってはいけない。地道に行かないとね。農家だとみんなそうだよ。景気が悪くても、お金が出る。

これから先わからない。年とっちゃ夢も希望もないよ。その日暮らしでさ。近所で70歳の方が畑で倒れて、家族が同居してたからいいけど。

人間いつかは最後があんだけど、考えてもしょうがないし。子どもや孫がいれば、別なかもしれないけど。夜、いろいろ考えて眠れなくなることがある。年寄りには皆そうなんじゃないかな。」

というように語っていた。

この事例が住む地域は、区画整理により、新築一軒家が建ち建てられている。旧部落は、8～10軒になった。市内に、甥や姪が住んでいるが、野菜が多く出来た時にとりに来るくらいであるという。

仕事関係の交流のみで、情報が行き届かない事例といえる。

<考察>

この事例は、地元出身者であり、近所との交流も薄れている。区画整理地区のため、まわりに新住民が増えるなかで、家族からのサポートを受けにくく、情報もな

いため、将来は地域から孤立していく可能性がある。経済的にも厳しい状況があり、将来に対して不安を抱えながら生活をしている。仕事場で話をすること、唯一仕事生きがいとなっている。しかし、その日暮らしであると話しているように、今後、身体的な機能が低下した場合、仕事も出来なくなった場合には、さらに、もっと精神面にも大きな影響があらわれるだろう。

そのため、このような事例にアプローチできる、地域全体で支えあえるような、地域のネットワークづくりが重要である。また、民生委員やボランティア、近所の人など、インフォーマルな面で、情報を得られやすい環境、相談しやすい、話を聞いてくれるような環境を整えることが必要であると考えられる。

(6) 4つの事例をみての特徴

典型事例としてあげた例にみられるように、何かしら問題を抱えている事例の多くは、男性であった。将来もっと高齢化率が上がれば、現在、比較的元気な女性も含めて、性差に関係なく問題がでてくるだろうと予測される。そのため、組織的にきめ細やかな対応ができるシステムをつくらない限り、「個」の高齢者に対応するには難しいのではない。

IV. ま と め

結果と考察を述べてきたが、まとめると以下のようになる。

- (1) サービスを利用している人は37名、一度も利用したことのない人は5名、この中で、情報がなく利用経験がない人は2名であった。この2名の事例は、やがて地域から孤立し、孤独や閉じこもり、生命の安全が脅かされるという危険性を孕むものである。
したがって、まず、情報が行き渡るようなシステム、在宅介護支援センターを中心とした地域支援ネットワークづくりが重要である。
- (2) サービス利用に関する情報は、日常生活に関するサービスでは、市役所など行政側からのアプローチによって得ており、介護予防、生きがいのサービスに関する情報は、単独、夫婦のみ世帯ともに、地域の交流から情報を得ている人が多かった。また、広報や回覧などの文書からも情報を得ており、これらが重要な情報源であることが示された。
- (3) 生活支援のためのサービスでは、利用者のニーズにあわせたサービスを提供してくれることが満足感を高めていたが、一方で、他人に甘えたくないという心理的抑制が働いていること、内容をよく知らないために利用に抵抗感があることがあげられた。
- (4) 介護予防、生きがいのためのサービスでは、利用している要因として、そのサービスが近くにあるといった「距離」、「内容」、「地域の交流」があげられた。しかし、利用していない人からは、遠すぎるという「距離」「世代の違い」「趣味や内容の違い」「地元住民と

新住民との価値観の違い」などがあげられていた。

- (5) サービスに対する要求や希望についてはわからないと答えた人が最も多かったが、この世代の人々にとって、後期高齢者となることが想像できないという背景があること、現在あるサービス内容も周知されていないことなどが、わからないという現実を強化しているものと推測された。
- (6) 45人の本調査を通じて、鶴ヶ島市の単独世帯、夫婦のみ世帯の高齢者に最も共通した印象は、彼らが孤独であるということであった。話し相手ではなく、話を聞いてくれる人がほしいといった切実な願いが彼らにあり、話を聞いてくれる人の有無がその人の主観的幸福感を左右しているということがみてとれた。したがって、高齢者福祉の重要なポイントの1つは、このような彼らの孤独感をどのように解決していくかという点にあり、「個」を視点としたきめ細やかな支援が望まれる。

V. 結 語

目的であげた、高齢者の福祉サービスに関する情報が行き届いているのかについては、サービス内容について周知徹底する必要性がみいだされた。

また、練馬区が実施している「ご用聞き福祉」と同じ役割や機能をもつ施策が、埼玉県鶴ヶ島市では有効であるのかという点については、地理的状況からも、必ずしも有効であるとはいえない。しかし、鶴ヶ島市の特徴をいかに、情報が行き渡るようなネットワークづくりや少なくとも地区ごとに、インフォーマルサポートの活用などで、ネットワークの形成がなされれば、「個」のニーズに対応できる、柔軟な展開が可能となるのではないかと考えられ、この点に関する施策の充実が望まれる。

この論文は、平成15年度修士論文をもとに作成したものである。

[註]

- 1) 内閣府編：高齢社会白書 14年度版
- 2) 前掲 1) に同じ
- 3) 練馬区 総合福祉事務所：ご用聞き福祉経過報告書～必要な人に必要なサービスを～ H15.1
- 4) 鶴ヶ島市：ともに輝いて生きるために つるがしま 2003
- 5) 前掲 4) に同じ
- 6) 工藤洋子：在宅介護サービスに関する研究の動向 教育学研究室紀要 第5号 女子栄養大学栄養学部教育学研究室 2003.2
- 7) 前掲 6) に同じ
- 8) 小林江里香、杉澤秀博、深谷太郎、柴田 博：高齢者の保健福祉サービスの認知への社会的ネットワークの役割－手段的日常生活能力による差異の検討－ 老年社会科学 第22巻 第3号 2000.10
- 9) 中田晴美、高崎綱子、大地まさ代、大井 照、小林万理：地域在宅高齢者における介護予防活動に関する研究－閉じこもり予備軍の状況と関連要因に焦点を当てて－ 日本在宅

ケア学会誌 2002 Vol.6 No.1 P61～P69

- 10) 片山優子, 安梅勅江, 園田恭一, 高山忠雄: 地域在宅高齢者の身体機能の維持と趣味活動に関する研究 日本保健福祉学会 1998 Vol.5 No.1 P35～P39

参考文献

- 1) 黄 元淳: 過疎・高齢化山村の諸問題と高齢者世帯の対応ー山梨県東八代群芦川区の事例からー. ヒューマンサイエンスリサーチ Vol.5 141-159 1996
- 2) 杉澤秀博, 深谷太郎, 杉原陽子, 石川久展, 中谷陽明, 金恵京: 介護保険制度下における在宅介護サービスの過少利用要因. 日本公衆誌, 第49巻 5号 2000
- 3) 河合克義, 唐鎌直義, 岡崎祐司, 横山寿一, 宮崎牧子: 地域介護調査からみた高齢者の実像ー「高齢者介護に関する住民生活調査」報告書, 自治労連・地方自治問題研究機構 萌文社 2001
- 4) 山田ゆかり, 石橋智昭, 西村昌記, 堀田陽一, 若林健市, 古谷野 亘: 高齢者在宅ケアサービス利用に関する態度に関連する要因 老年社会科学 第19巻第1号 1997.10
- 5) 安達正嗣: 高齢期家族の社会学. 世界思想社 1999
- 6) 村嶋幸代, 堀井とよみ, ルネ・ホランダー: 行政が支える24時間在宅ケア. 日本看護協会出版会 1997
- 7) 伊田広行: シングル単位の社会論 ジェンダー・フリーな社会へ. 世界思想社 2000
- 8) 佐藤秀紀, 佐藤秀一, 山下弘二: 地域在宅高齢者における活動能力と社会活動の関連性. 日本保健福祉学会 Vol.8 No.2 2002
- 9) 唐鎌直義: 日本の高齢者は本当にゆたかか 転換期の社会保障を考えるために 萌文社 2002
- 10) 小野ツルコ, 大西美智恵, 田中昭子: 在宅介護における福祉サービス利用の意義. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 第7巻 1号 25-31 2000
- 11) 長谷川万希子, 岡村清子, 安藤孝敏, 児玉好信, 古谷野 亘: 在宅老人における孤独感の関連要因 老年社会科学 第16号 第1号 1994.9
- 12) 米沢弘恵, 石津みゑ子, 甲斐一郎: 在宅高齢者の孤独感と同居家族, 別居子, 友人・知人との関係ー家族形態による比較ー Health Sciences Vol.18 No.3 2002
- 13) 直井道子: 幸福に老いるために 家族と福祉のサポート 勁草書房 2001
- 14) 川上昌子: 都市高齢者の実態ー社会福祉学としての考察ー 学文社 2003